

月刊

日本語

日本語を教えた
あなたに贈る応援マガジン

10

2010 OCT



MICAO

さらば! 文法コンプレックス



INTERVIEW

異文化と出会う

バレエダンサー

岩田守弘さん

「バレエは人生に必要なもの
ロシア人の考え方に共感」

日本語教師のための
ブラッシュアップ講座特集
学び続ける教師になろう!



アルク
www.alc.co.jp

NAFL 日本語教師養成プログラム

創22年10月1日発行(第23巻第10号・通巻274号) 毎月1回1日発行 昭和63年6月6日第三種郵便物認可



落語こばなしの小噺を取り入れ、 笑いながら、日本語力を伸ばす！

長年、アメリカで日本語教育に携わってきた畑佐一味かづみさんは、現在、学生に小噺を演じさせるプログラムを実践しています。日本語会話力と日本文化を笑って学べるこのユニークな試みについて、ご本人に語っていただきます。

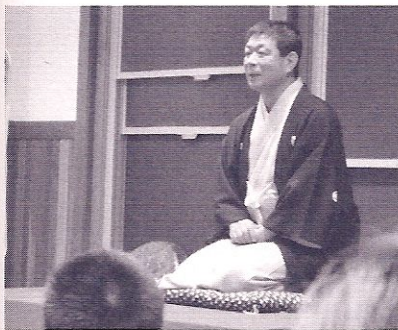
文・写真○畑佐一味(バデュー大学教授/ミドルベリー大学日本語学校校長。1983年から米国で日本語を教えている)

日本語教育と落語が出会うまで

私が、夏の二カ月間校長を務めている、ミドルベリー大学夏期日本語学校というのは、米国バーモント州の小さな町にある大学で毎年行われている、外国語の全寮制夏期集中講座です。現在、外国語学校が一〇校開校され、キャンパスではいろいろな外国語が聞こえますが、英語は聞こえてきません。「外国語が聞こえる」というのはまさにそのとおりで、学生たちは全員、「学習している言語以外は使わない」という誓約書にサインしているからです。我々教師陣もこの規則をかなり厳格に守って、学生たちと九週間、衣食住、そして、勉学を共にします。

この夏期学校の歴史は古く、いちばん古いフランス語学校は今年で創立九五周年を迎えます。日本語学校は一九六九年に開始され、二〇〇五年に就任した私は六代目の校長です。全米屈指の外国語学習環境を提供しているプログラムとして、高い評価を得ています。

落語を取り入れるに至った経緯



柳家さん喬師匠。1968年に初高座を踏み、1981年に真打昇進。現在、落語協会常任理事。

は、偶然が重なった必然だったように思われます。私は校長に就任したばかりのころ、どのようにして、当夏期講座をより良くし、日本国内で開催される夏のプログラムと競争することができるか、その方法を模索していました。そのころ、筑波大学の留学生センターの知人で落語好きのS先生が、留学生に落語を紹介する活動をなさっていることを知りました。その先生が柳家さんきょう喬師匠と懇意になさっていたので、お願いして、師匠を紹介していただきました。お目にかかった時に、「アメリカに来て学生たちに落語を見せてやっていただけませんか」とお願いしたところ、師匠は二つ返事で「ぜひ」とお

っしゃってくださいだったので。それから一年後の二〇〇六年七月、柳家さん喬、柳亭左龍きりりょう、そして紙切りの林家二楽にぎやくのお三方が、初めてバーモントにいらっしやいました。最初の質問は「バーモントカレールって本当にあるんですか？」でした。二つ目の偶然は、私が下町生まれの下町育ちだったことのように思います。私は、昭和三〇年代に台東区根岸という所で育ちました。まさに「ALWAYS 三丁目の夕日」の世界です。高校の時に初めて古典落語をテレビで見たのですが、この時「落語はわかりやすい、身近なものだ」という印象を持ちました。それは、落語の中に出てくる地名がみんな知っているものばかりだったからです。実際に落語に登場してくる場所を自転車ですら覚えてみました。最後の偶然は、落語が話芸だったことです。話芸である以上、言語の教育に携わっている我々にとって、落語はとても近いところに位置付けることが出来ます。でも、これは実際やってみて発見したことで、初めはそんなふうには考えていません



「あくび指南」で記念撮影。学生たちは自分たちの日本語レベルに合わせた小断を選び、師匠の直接指導を受けた。

●小断の例：患者「先生、私、手術するの初めてなんですけど、大丈夫でしょうか」 医者「大丈夫ですよ、私も初めてですから」

した。

二〇〇六年の当大学への落語家訪問は、大成功ではありましたが、こちらの不慣れや不手際もあり、とにかく学生に落語という古典芸能を見せるということぐらいしか達成できませんでした。でも、学生たちが一流の芸を間近に見て感動したことは、確かでした。帰り際に、さん喬師匠が「先生、来年は何日に来ますようか」と軽い口調で言ってくださった時には、心底うれしかったです。

小断で、日本語と文化を学ぶ

翌年の二〇〇七年七月に再来訪なされた時には、プロの芸人だけによる落語会ではなく、学生にも何か舞台の上でやらせてみたらどうだろうかと思いい、落語クラブを結成しました。学生に、ごく短い小断を覚えさせ、師匠方に稽古をつけてもらったところ、学生たちは大喜びで積極的に取り組みました。これは「観る文化」が「体験する文化」に変化したという意味で、この活動にとっての転機でした。学生たちは発音や台詞回しに気を付けながら、「お客さん

に笑ってほしい」あるいは「自分が受けたい」という動機を持って、練習に取り組みました。師匠方もやさしく丁寧に学生たちの練習に付き合ってくださいました。発表会当日、舞台裏で出番を待っている学生たちは、緊張した面持ちで自分の小断を繰り返していました。そんな学生の姿は、さん喬師匠の目にも新鮮に映り、一緒に心配なさってくれて、出番が来た学生一人ひとりの背中をポンとたたいて舞台上に送り出しているっしやいました。学生たちからは「初めは緊張したけど、うまくできました」とか「人の前で話すのが怖くなりました」といった感想が聞かれました。

以来、今年で四度目の小断活動を行いました。夏学校の後で、日本に留学した学生たちが寄席に出没したりするようにもなりました。今は、これまでビデオ録画してきた学生の練習風景などを掲載したウェブサイトを作り、それを使ってこの活動を広めていきたいと思っています。興味を持ってくださいました読者の方は、ぜひ当ページ下のサイトにアクセス

なさってみてください。

「笑う」のが嫌いな人はいません。ですから、人を笑わせるのは楽しいことです。異文化であっても一緒に笑える笑いもあるし、特定の文化固有の笑いもあります。現在は、YouTubeのようなビデオ投稿サイトを利用して、日本語学習者による世界小断コンテストが実施できないかと、考えています。日本人には理解できない不思議な小断が、世界のどこから投稿されてきたら、それだけで面白いと思いませんか。もちろん、審査委員長は柳家さん喬師匠にお願いすることになるでしょう。



発表会後の一枚。後段、左端が柳亭左龍師匠、2人目が林家二楽師匠、5人目が畑佐一味先生。